

3. 立派な手本で教育を

“勉強”は強制しないこと

幼児は本性が、“まねる”ことと“繰り返す”こと、つまり“学習”することが大好きなのですから、敦育とは、親が自

分の言行によく注意して、出来る限り立派な手本を示すことに尽きる、と言えましょう。

だから、私は、猫をかぶってでも、親は子供の目や耳の届く所では理想の親であるようにふるまう責任がある、と言いたいのです。親が美しく優しい言葉を語り、立派な行動をすれば子供はそれを繰り返しまねるので、自然と立派な子供になれるのです。

もしも子供が、汚い言葉を語り、醜い行為をするならば、それは親がそういう言動をして、子供がそれをまねた結果に違いありません。子供が悪いのではなくて、その罪は親にあると言えます。

このように、“学習”とは、幼児が生れながらにして持つ本性であるのに対して、“勉強”とは、本性に背いて、いやなことを我慢し、努力してやることを言います。子供の学習している姿と勉強している姿とは、

外見では同じように見えても、中味は大変な違いがあるのです。

学習は人間の本性に従って行うものですから、自然と楽しい気持ちになります。だから孔子は「学んで時にこれを習う。またよろこばしからずや」と言っているわけです。ところが、“勉強”は、人間の本性に背いていやなことをするので、早く止めたいと思うだけで苦しみの連続です。

“強”とは、“しいる”と読み、強制するのが本義の字です。だから、“勉強”とは強制された仕事から早く免れたいと思って努力するのが本義の言葉です。

商人が物を売る時に「勉強しておきます」と言いますが、それは「この値段ではとても売れないのですが、あなたのために我慢して努力して売ります」という意味です。

さて、このように、“学習”と“勉強”とは、見かけは同じに見えても、中味は大変な違いがあるのです。これを決して混同してはなりません。

勉強は人間の本性に背くものですが、それは強制することにあります。馬だって、川端まで連れて行くことは出来ますが、水を飲ませるこ

とが出来ません。一寸の虫にも五分の魂で、幼児といえども、強制していやなことをさせることは出来ません。

「栄養があるから食べなさい」と言って強制したら、幼児はますますその食べ物を嫌うようになります。それよりも、親がそれをおいしそうに食べたり、子供が空腹になり、進んで食べるのを待つことです。

空腹になれば何でもおいしく食べられますし、親がおいしそうに食べていれば、それをまねして食べたいと思うようになるものですから、絶対に「食べなさい」と言って強制すべきではありません。